がんと生きるすべての人を応援します。
がんサポート

自分がその治療に安心感を得られるかどうかが重要 4期の大腸がんを克服した開業医

取材・文●髙橋良典
撮影●「がんサポート」編集部
（2020年8月）

鹿島田忠史さん　誠快醫院院長

かしまだ ただし 1948年東京都生まれ。67年都立日比谷高卒。73年横浜国立大学工学部建築学科卒。積水ハウス（株）研究所、（株）PACを経て80年指圧師免許、81年柔道整復師免許取得。83年東邦大医学部入学。89年卒業後、牧田総合病院に勤務。91年東京都品川区に内科・整形外科の誠快醫院を開業。著書に『安全・明快・短時間で完了―ゆがみ取りSPAT』（ヒューマンワールド）、『がんを再発させない暮らし方』（主婦の友社）などがある

がん治療のセカンドオピニオンを求めてやってくるがん患者さんの相談に乗っている、代替医療の誠快醫院院長の鹿島田忠史さんが、ステージⅣ期の大腸がんに罹患した。大腸切除手術は受けたものの、肝臓に3カ所の転移は残ったまま。その治療を始めるは体力が余りにも低下していた。

そこで自身の体験を活かした独自の免疫強化療法の結果、肝臓の3カ所のがんは消えた。保険制度の束縛から離れ、自由診療を貫く鹿島田さんに自身の体験を訊いた。

大きなストレスを抱えた結果、大腸がんに

がん治療のセカンドオピニオンを求めてやってくる患者さんに、「がん免疫強化療法」という代替医療を施してきた鹿島田さんが、自身の体の変調に気づいたのは2018年春のことだった。

排便時に鮮血が出るようになり、貧血による倦怠感にも悩まされるようになった。

「これは、おかしい」と感じてはいたが、しばらく様子を見ることにした。

「多くのがん患者さんを診てきた私ですが、それだけに、自分ががんであるということを否定したかったのだと思います」

しばらく様子を見ていたものの、依然として出血は続き、体調が優れない状態は続いた。

どうしようもなくつらくなった鹿島田さんが病院に行き、CT検査をしたのは同年9月になってのことだった。そのときには、体重は13kgも落ちていた。

CT検査の結果、横行結腸（おうこうけっちょう）と上行（じょうこう）結腸の2カ所にがん、肝臓に3カ所転移が見つかり、大腸がんのステージⅣと診断される。

「検査を受ければ、がんと診断され即入院になるな、と思っていましたが、案の定入院となりました」

鹿島田さんには大腸がんに罹った原因には思い当たるところがあったという。

「実は、数年前から親族間での大きなストレスを抱えた生活を送っていて、精神的にかなり参っていました。私ががんに罹った原因の1つに、このストレスがあったことは間違いないと思います」

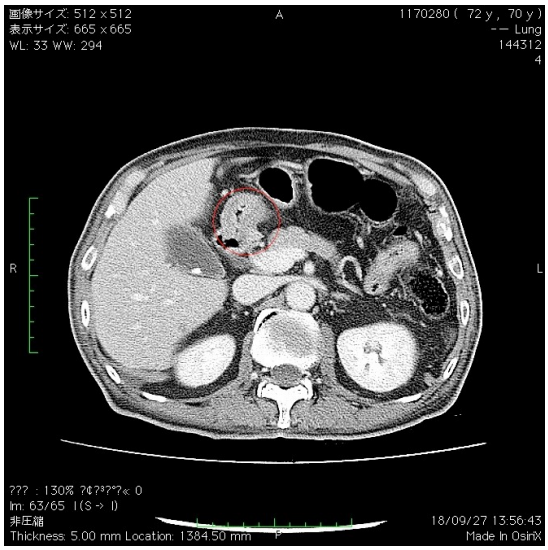
腹腔鏡手術で大腸の約半分を切除

大腸がんを告知された1週間後の2018年10月初旬、大腸の約半分を切除する腹腔鏡手術を受けた。手術時間は約4時間半だった。

「私は代替医療を行っていますが、標準治療を否定するものではありません。手術しなければ、大腸がんは治らないと思っていましたから」

しかし、大腸の腫瘍は取り除いたものの、肝臓に3カ所転移した腫瘍は残ったまま。

実は、鹿島田さんは下血が続いていて、かなりの貧血状態だったこともあり、大腸がん切除の手術中に最高血圧が70まで低下、一時危篤状態に陥ったという。



原発巣のがん（赤で囲った所）

病院から渡されたCT画像を納めたCD

手術前、鹿島田さんは主治医にこう話していた。

「手術はお願いしますが、無条件に抗がん薬治療をするつもりはありません。悪性リンパ腫や白血病は別にして、抗がん薬の一般的な効果は延命ですよね。それだけならまだいいのですが、副作用でQOL（生活の質）は確実に低下しますから。ならば、つらい5年より、QOLを維持できる3年を選びたい」

そう話していた鹿島田さんだが、入院中にゲノム（遺伝子）診断の記事を見ていたことで、もし自分に効果のある薬が見つかれば、抗がん薬を使用することに抵抗はなかった。

「ただ現行の保険制度では、抗がん薬を遣り尽くして、にっちもさっちもいかなくならないとゲノム診断はやれないということです。そこで主治医に相談すると、『数10万の費用はかかるけど』、とゲノム診断を行っている大学病院を紹介されました」

その大学病院を通してがん組織を米国に送った結果は、1カ月半後に判明した。

「有効な薬が見つかる確率は約10%なので期待してはいませんでしたが、自分のがんは既存の抗がん薬では効果がないと判定されました」

その間にも、肝転移の治療をどうすべきか、考えていた。

手術をするにしても、肝機能が落ちていて体力的に難しい。それでは「定位放射線治療はどうだろうか」、と別の病院にも相談に行ったが、無理だということだった。

残された治療法にはラジオ波焼灼術があったので、1カ月後に大学の後輩がいる病院に相談に行きMRIを撮影すると、肝臓にあった3カ所中2カ所のがんが縮小していると告げられた。

それを聞いて、何も慌ててラジオ波治療を行わなくても、としばらく経過を見ることにして、開業以来行ってきた「がん免疫強化療法」を本格的に実践していくことを決意した。

建築士から医師へ

実は、鹿島田さんはストレートに医師になったのではない。横浜国立大学建築学科を卒業後、積水ハウス（株）に入社。2年間研究所に配属され、設備設計の仕事を担当していた。

1981年1月。結納の席で

「大学に入学した当時は、クリエイティブでカッコ良く、楽しそうな仕事だと建築士を目指していたのですが、入学してみて自分にアートの才能がないことに気づかされました。そこで設備設計ならいいのかな、と思って積水ハウスに就職しました」

鹿島田さんが大学の建築学科を選択したのも、就職先に積水ハウスを選んだのも〝自由にやっていけそうだ〟と思ったからだが、当時の上司を見ていて楽しそうにも見えなかった。

「自分の20年後、30年後が見えてきたんですね。そんな先の見えた決まり切ったコースを歩むのは嫌だな、とそのとき思いました」

鹿島田さんが生まれた家は江戸時代からの商家だったこともあり、サラリーマンとして縛られて生きていくのが肌に合わなかった。

それなら、〝大手ではなく設計事務所なら自分に合った自由にやれる仕事が見つかるのではないか〟と思い、設計事務所に転職したのだが、案に反して収入は下がるのに勤務時間は長く、仕事はキツクなっていった。その上、設備設計は建築のなかの一部で、単独で仕事を受ける訳にはいかない。そうすると独立しても低賃金、長時間労働、かつ収入は不安定ときては、人生暗い。

「実家で母親が美容院と指圧の治療院をやっていて、そこそこ収入もあるし、何より医師免許を取って医院を開業すれば誰にも縛られずに自由に仕事が出来るということに惹かれました」

そこで設計事務所を退職、ある大学の医学部を受験。学科試験は合格したのだが、最終合格の条件が寄付金で金銭的余裕がなかった。もう1年頑張ってみようと再度、受験するのだが、今度はどの大学の医学部にも不合格。

仕方なく医学部の受験を諦め、設計事務所退職2年後に按摩マッサージ指圧師の免許を取得。その1年後、柔道整復師の免許も取得して、母親の経営する治療院で働いた。

指圧の仕事をしていくうちに、やはり医師免許がないと何かと制約が多く、医師免許を取得するしかない、と思うようになった。

鹿島田さんは4カ月ほど猛勉強して、83年に東邦大医学部に入学する。

89年に東邦大医学部を卒業、国家試験に合格。晴れて医師免許を取得し、91年品川区大井に自由診療の誠快醫院を開業する。

「最初から自由診療で開業しました。それは81年に操体理論の創始者である橋本敬三先生に出合い、1年間橋本先生の所に研修に行ったことが大きかったです。橋本先生の思想は素晴らしく、この思想を生かす診療をやりたかったのです。

その診療を行うには、保険診療では絶対にできなかったので、自由診療で開業しました。操体理論とは、『あとが気持ちがいいは、体にいい』、ということが大原則で、やっていて苦しいことや痛いこと、つらいことはやらない、ということです」

このページを印刷する

1 2 次ページへ

自分がその治療に安心感を得られるかどうかが重要 4期の大腸がんを克服した開業医

取材・文●髙橋良典
撮影●「がんサポート」編集部
発行：2020年8月
更新：2020年8月

シェア 46 ツイート

実践した免疫強化法とは

鹿島田さんの実践したがん免疫強化療法とは、橋本敬三さんから教わった呼吸・食事・運動・ストレス管理・生活環境の5項目だ。

「がん細胞が好む状態は、『低体温・低酸素・高血糖』です。呼吸でいえば、浅い呼吸では体内に取り入れる酸素の量が少なく、低酸素状態になります。ですから、意識して深くて適度に速い呼吸法に改善できれば、がん細胞の嫌う『高体温・高酸素』な体に変えることができます」

「食事は肉を主体の食事から、魚を主体にした糖質控えめな食事にしました。

しっかり睡眠を取り、月曜日の朝食は抜くという『プチ断食』を行い、食べ過ぎないようにする。しかし、あまり厳密にやるとそれがストレスになるので、適度に実行するのがいい。

橋本敬三先生の理論ですが、一番大切なことは、『あとが気持ちいいは、体にいい』、ということです。それを

「誰に何をやってもらい、自分で何をしたら一番安心できるか、安

食事に当てはめてみれば、『ああ、美味しかった』、という一言が出れば素晴らしい食事だったということです。それは食べている最中も美味しくて、食べ終わったあとも満足感があるということです。このような食事が理想だということです。食材についても、『ああ美味しかった』、という食材は、体にいい食材ですよ」

心感を得ることが大切」と語る鹿島田さん

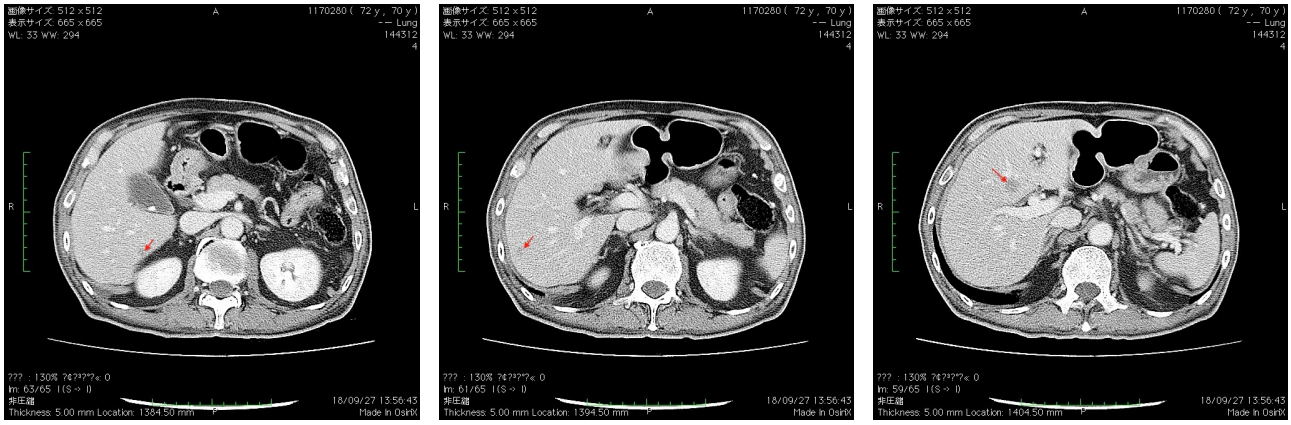
ストレス管理に重点を置いた生活を実践したのだ。

「それは一度崖っぷちに追い込まれ、人生に限りがあるとわかったので、これからは自分の気持ちに素直に生きようと思ったからです」

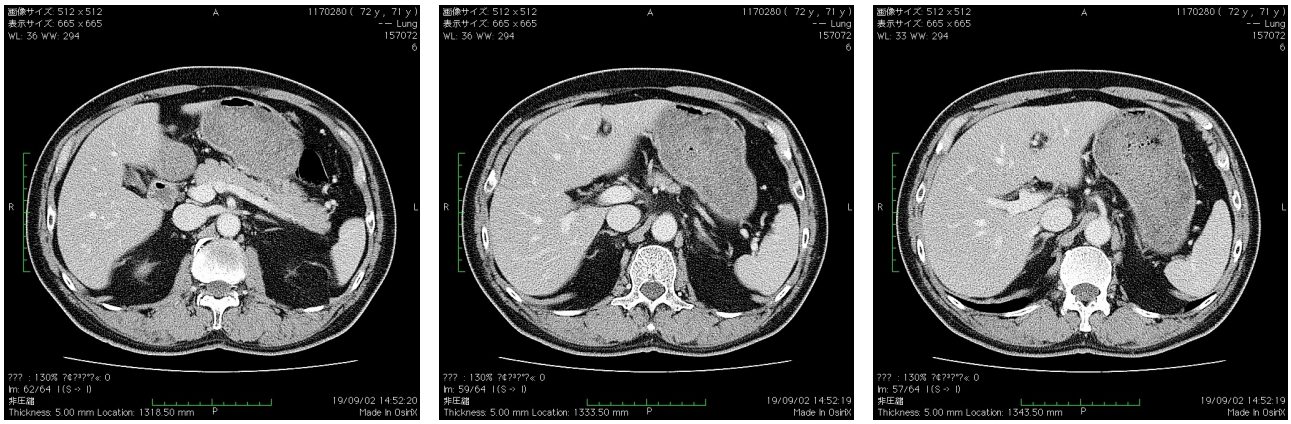
3カ所の肝転移が消えた

鹿島田さんがこのような免疫アップ生活を送った結果、退院から約8カ月後の2019年5月の検査の結果、肝臓に転移していた3カ所のがんのうちの小さい2カ所の腫瘍が消えていた。

さらに約1年後の2019年9月11日には造影CT検査の結果、残る1カ所の大きめのがんも消失していた。



2018年9月。3カ所の肝転移巣のCT画像（赤い矢印）



2019年9月、3カ所の転移巣は消失

鹿島田さんは驚いていた主治医に、「私みたいにがんが消えた例はあるのですか？」と尋ねると、「1回だけ抗がん薬治療を行って消えた例が1例だけありますが、鹿島田先生のようなケースは初めてで、医局で話題になっています」との答が返ってきたという。

実は、鹿島田さんは「がん免疫強化療法」の他にも2剤の薬を服用していた。

「抗がん薬としては承認されていませんが、私は医師ですので糖尿病治療薬として使用されているメトホルミン（一般名メトホルミン塩酸塩）とB型肝炎治療薬として使用されているセロシオン（同プロパ

ゲルマニウム）を、主治医にも報告して服用していました。これらの薬を服用したのは、副作用がほとんどないに等しいからです。統合医療を行っているとよく起こることなんですが、結果的にがんが消失することはあるんです」

鹿島田さんはがん患者さんや家族のために是非心に留めておいてほしい、とこうアドバイスしてくれた。

「自分ががんに罹ってわかったのですが、誰に何をやってもらい自分で何をしたら一番安心できるか、その安心感を得ることが非常に大切です。ですから、いまかかっている病院の主治医が信頼でき、安心感が持てるのならそれでいいのです。そうでないなら、安心できる治療を探すしかありません。治療する側が内心、『完治は無理だな』、と思っている場合、そんな医師にすがって治ると本当に思えますか？ ということです。ですから、そうなったときにどうするか、ということです。

何をすれば安心感を得られるのかは、個々人によってみんな違います。また、どういう基準でその治療をやるかやらないかを決めるのには、私自身はある程度有効性のあるエビデンス（科学的根拠）がないと信用できません。

次がQOLなんですよ。病気になるのも治るのも同じ順番で起きます。体調、機能（内科的検査値の異常・正常化）、器質（外科的異常の発生・修復）の順番です。

入り口の体調が良くならないと先はないのです。ということは、副作用が強い薬は最初から体調を悪くして自身のQOLを落とします。この条件に当てはまるものを探した結果がセロシオンやメトホルミンだったのです」

現在、半年に1回、検査を受けているが、体調は頗（すこぶ）るいいという。

最後に鹿島田さんは、医療の4つの目的についてこう語ってくれた。

「まず、治癒、次に延命、3番目が症状の軽減、最後が予防です。ほとんどの医師の頭の中ではこの順番で治療を選定しているのです。がん治療を例にとれば、治癒を目的として、まず病巣の切除手術が行われる。2番目に多くの場合、治癒ではなく延命が目的で患者さんがつらくても抗がん薬治療を行うことになります。3番目が緩和ケアなどの症状軽減が目的になります。世の中で行われている治療の大部分がこの3つですね。最後が予防医療なんですが、医療全体の中では軽く見られているのは残念です」

印刷用表示に切り換える

前のページへ 1 2

同じカテゴリーの最新記事

ぼ～っとして生きてたら今日1日がもったいないと伝えたい AYA世代の元教師が精巣腫瘍になって

やっと診断がついた悪性リンパ腫ステージⅣ 生き方の呪縛から解き放されコスプレスタジオを開設

〝がんになってもハッピーに人生を歩んでいくことが健康〟の精神で 絶望の淵に立たされた乳がん患者が撮影スタジオを設立

回り道をしたが、ALK融合遺伝子変異ありの結果で道は開けた 全身に転移した肺腺がんステージⅣbからの生還

自分の医者体験から標準治療を拒んでいたが…… 今後は再発防止や予防医学を代替療法で